

「悪人に平穏なし」 ★★★

2 0 1 3（平成 2 5）年 2 月 2 5 日鑑賞

<シネ・リーブル梅田>

監督・脚本：エンリケ・ウルビス

脚本：ミシェル・ガスタンビデ

製作：ゴンサロ・サラサー・シンブソン

サントス・トリニダ（失踪人捜査課の中年刑事）／ホセ・コロナド

ロドルフォ（失踪人捜査課でサントスの相棒）／ロドルフォ・サンチョ

チャコン判事（売春宿殺人事件の捜査を指揮）／エレナ・ミケル

レイバ（チャコン判事の部下、サントスと同期）／フアンホ・アルテロ

アナ（チャコン判事の秘書）／エルビラ・クアドゥルパニ

セルダン（麻薬取締局の捜査官）／エドゥアルド・ファレロ

メリダ（中央情報局の捜査官）／ミゲル・デ・リラ

オンティベロス（中央情報局の部長、メリダの上司）／ペドロ・マリ・サンチェス

2 0 1 1 年・スペイン映画・1 1 4 分

配給／シンカ

<ゴヤ賞 6 部門受賞！しかし、冒頭から難解！>

本作は邦題だけでは何の映画かサッパリわからないが、2 0 1 2 年ゴヤ賞で最多 6 部門（主演男優賞、監督賞、作品賞、脚本賞、編集賞、音響賞）を受賞したのだから、きっと名作。本作の主人公は、ひげ面の中年刑事サントス・トリニダ（ホセ・コロナド）だ。彼はかつては周囲から絶大な信頼を集める敏腕捜査官だったが、今は失踪人捜査課でしがらみ仕事しかやっていないらしい。映画冒頭、そんなチョイ悪（いや、極ワル？）刑事のサントスが、かなり酔っぱらった状態で酒場を追い出された後、目に付いたバー（売春宿？）「クラブ・レイディーズ」に入っていくシーケンスが描かれる。もっとも、近時の邦画と違って本作には何の説明もないから、このスクリーン上での展開が何を意味するのかはほとんどわからない。サントスが警察手帳を出したところで、はじめて「ああ、こいつは刑事なんだ」とわかる程度だ。それにしても、飲酒運転するわ、閉店だと断られると「音楽が流れていたのだから酒を飲ませろ」と強要するわ、何とタチの悪い刑事だろうと思っていると、それだけにとどまらず、ここでいきなり 3 人の従業員への殺人事件が勃発！この殺人事件の動機は一体ナニ？これは、酒飲みたさのアル中刑事による突発的な一般市民への殺人事件？そう思っていると、冷静さを取り戻したサントスは刑事らしく（？）周到な証拠隠滅工作をやり始めたから、更にビックリ。ところが、サントスは犯行を目撃した従業員を一人だけ逃がしてしまうことになったから大変だ。さあ、日本でリメイクするならビートたけし主演で決まりのこの中年刑事は、その後どんな行動を・・・。

<中盤に見る二本の捜査（？）のサスペンスは？>

殺人事件の捜査を指揮するのは女性判事のチャコン（エレナ・ミケル）だが、それが私にはイマイチわからない。それはともかく、本作はサントスと同期の刑事レイバ（フアンホ・アルテロ）と女性秘書のアナ（エルビラ・クアドゥルパニ）を補助者としたチャコン判事による犯人捜査が中盤のサスペンスの軸になる。しかし、その展開はややこしくてほとんど理解不可能だ。もう一つの本作の捜査（？）は、サントスによる（証拠隠滅のための）目撃者捜しのサスペンスだが、これも登場人物が多いうえ、その名前と顔がなかなかわからないから、ほとんど理解不能だ。ただ、チャコン判事の捜査が進展するにつれて、サントスはいずれチャコン判事によって摘発されるだろうということは容易に想像できる。

それに対して意外なのはサントスの捜査（？）がコロンビアマフィアや F A R C（反政府武装組織）さらにモロッコの急進的聖戦主義組織やイスラム過激派などに連なっていくことだ。また、本作には中央情報局の捜査官メリダ（ミゲル・デ・リラ）やその上司のオンティベロス（ペドロ・マリ・サンチェス）が登場してくるから、チャコン判事が「なぜ麻薬捜査を中央情報局が追っていたのか？」と質問するのは当然。本作は 2 0 0 4 年 3 月 1 1 日にマドリードで起きた同時爆破テロ事件を題材にした作品というふれこみだが、後半になってそれが少しずつ明らかになってくる。なるほど、なるほど。しかし、本作はそんな政治的な陰謀を誰がどのように企んでいたのかに焦点を当てた映画ではなく、あくまでサントスの生きざまに焦点を当てた映画だから、本作では中盤に展開される二本の捜査のサスペンスに注目！

<彼は英雄？それとも、ただのアル中？>

本作は日本人には恐ろしく難解だが、本作には①サントスによる売春宿での殺人は一体なぜ？②証拠隠滅のための目撃者追跡はかえって自分の疑惑を拡大させるだけでは？③目撃者追跡の中で偶然テロリストたちの存在を知ったサントスはなぜそれを一人だけで解決しようとしたのか？という 3 つの疑問がある。チャコン判事の捜査がサントスの動きの後手後手に回ったのは仕方ないが、本作を観ている限りそれは理詰めでスピーディー。しかし、テロリストたちの恐るべき陰謀があることなどチャコン判事は知るよしもないから、サントスとチャコン判事の協力体制が築けなければスペインは大変なことに・・・。

もっとも、日本人には 2 0 0 4 年 3 月 1 1 日マドリードで起きた同時爆破テロ事件をほとんど知らないから、本作後半に着々と進行していくテロ実行作戦を見ても危機感を共有できない面がある。しかし、もともと優秀な捜査官だったサントスにしてみれば、目の前で起きているこんな事態を黙って見逃すことができなかったのは当然かもしれない。そんな中で展開していく、ラムコークばかり飲んでいるアル中刑事サントスの小気味よい（？）生きざまが本作の魅力だが、同時にこんな生き方しかできない悲しさもひしひしと伝わってくる。本作にはテロリストたちによって設置された爆弾が爆発するシーンは登場しない。これは、ひょっとしてサントスの命がけの銃撃戦によって爆破装置の起動を阻止できたためかもしれないから、そう考えるとサントスは英雄？しかし、冒頭でのハチャメチャな「動機なき殺人」行為を見れば、やっぱりサントスはただのアル中刑事？邦題の意味を味わいながら、そんなことをしっかり考えてみたい。

2 0 1 3（平

成 2 5）年 2 月 2 6 日記